

ジョン・ウィーヴァーによる 18 世紀ダンスの「再文脈化」－『舞踊史試論』から

青山学院横浜英和中学高等学校 小澤里佳

はじめに

ダンス史における 18 世紀は、バレエ・ダクシオンの時代で、芸術の一ジャンルとしてのバレエ（すなわち、ダンス）史の端緒とされる。しかし、本研究で焦点を当てる 18 世紀初頭イングランドの舞踊関係者 ジョン・ウィーヴァー（John Weaver、1673～1760 年、以下、ウィーヴァー）の著作『舞踊史試論（*An Essay Towards an History of Dancing*）』（以下『試論』）では、芸術の文脈に限らないダンスが議論される。本研究では、ウィーヴァーが、芸術以外の文脈で 18 世紀のダンスを認識する見方を提示したことを明らかにする。

「技芸・芸術」としてのダンス

『試論』のなかで「ダンス」は、Art という語で「技芸・芸術」（読み方は「アート」とする）として論じられる。ウィーヴァーのいうダンス（Art）を「技芸・芸術」と理解するのは、『試論』における Art が「技芸」か「芸術」のどちらかとなることも、「技芸」と「芸術」の 2 つの意味を含意することもあるからだ。この時点で、ウィーヴァーの考えるダンスが「芸術」に限らないのは確かである。それがどのようなものを明示するのが、機能からダンスを同定する 3 つの有用性 Use、すなわち徳育 Qualification、運動 Exercise、気晴らし Diversion というウィーヴァー独自の概念である。

3 つの有用性 Use

ダンスの有用性は、古来、多くの著述家たちによって、さまざまな文脈で言及されてきた。ウィーヴァーの『試論』では、古典古代から中近世の先人たちの権威ある言説（教育思想や運動論など）を 3 つの有用性のもとに整合的にまとめている。

まず、ウィーヴァーがダンスを Qualification というとき、それは、優れた資質や徳を備えた良き人を作ることを志向した人格陶冶、すなわち徳育、および徳そのものという意味である。また、彼はダンスを「古く尊ばれた *anciently esteemed an Exercise*」、最も優れた運動だと一貫して主張する。そして、Diversion は気晴らしで、彼は、古典古代においても目下の時代においても、気晴らしとしてのダンスを考えていた。

実際『試論』では、気晴らしにあたる内容が、徳育と運動を詳論するなかに含まれている。以降では徳育と運動を順に検討する。

徳育 Qualification としてのダンス

ウィーヴァーは、ダンスにおいて、徳育としての機能および効用を主張するときに、ロック（John Locke、1632～1704 年）の教育思想を導入している。ロックの教育思想に依拠しながら、ウィーヴァーは、徳育としてのダンスが「自信 Confidence」をもたらし、それが「振る舞い Behavior」や「気品ある動き graceful Motions」など、外見に表れることを主張した。さらに彼は、教育によって身のこなしが洗練されると、人の身体の動きは次のように、パフォーマンスの場の見る者を魅了すると説明している。「それら [ダンサーの四肢] が最も力強く動いているとき、地上から離れていようと、または地上にいようと、[身体の] 部位の美しい位置を震えさせたり、引きつらせたり、あるいは、乱すようなことはない」（Weaver, *An Essay*, p. 18）。

運動 Exercise としてのダンス

ウィーヴァーは、ルキアノス（Lucian、120～180 年ごろ）の著作『身体表現について』を根拠の一つとして、ダンスを最も優れた運動と主張する。ウィーヴァーは、ダンスが観客にとって「喜ばしい見世物 *delightful Spectacle*」で、見る者の心を奪う点で気晴らしになると同時に、パフォーマンスにとっては「[身体を健康にするのに] 最も価値のある、調和のとれた運動 *the most valuable and proportionable Exercise*」で、肉体を柔軟かつ強くする肉体鍛錬でもありと考えている。具体的には、「ダンスの上品な動き、そして気品あるポーズ；回転、ステップ、屈曲、起立、そしてジャンプは、観客に大いなる喜びを与え、そしてパフォーマンスには、観客に与える喜びと同じくらの健康を与える」（Weaver, *An Essay*, p. 30）、「…それ [ダンス] は、…精神を鼓舞し、身体を鍛錬し、… [受け手の] 耳、目、そして魂そのものに訴える」（Weaver, *An Essay*, p. 53）と説明している。

結論

ウィーヴァーが、3 つの有用性という論点から芸術以外の文脈でダンスの位置づけを考えたことは、ダンスの「再文脈化」である。彼が古典古代から中近世のダンスの歴史に遡って主張の根拠を引用していることからしても、古来、ダンスは「芸術」に限らない。そのため、芸術以外の文脈にもダンスを位置付けることは、本来、ダンスが見出されるはずの文脈を再び明みにするという意味で「再文脈化」といえよう。ウィーヴァーによるダンスの再文脈化を指摘した本研究は、芸術の文脈に傾倒した 18 世紀バレエ・ダクシオンの時代のダンスに、新たな一面を与える点で意義があると考えられる。